

発刊のあいさつ

富山大学長 時 澤 貢

本学は平成11年に創立50周年を迎え、11月13日には記念の式典を挙げこの慶事を祝うことができました。諸般の事情で遅れていた記念事業の一つである「五十年史」もようやく上梓する運びになりました。

顧みますと、富山大学は昭和24年5月31日、「国立学校設置法」の施行により、旧制の富山高等学校、富山師範学校、富山青年師範学校、富山薬学専門学校、高岡工業専門学校の5校を統合して、新たに文理学部、教育学部、薬学部および工学部の4学部からなる、学生定員690人の新制度の国立大学として発足しました。

第2次大戦後の荒廃と激動の中で発足した新制大学は、国家利益に奉仕する少数のエリート集団の育成を目指した戦前の高等教育の在り方に対する反省から、世界の平和と社会全体の発展に寄与する人材の育成を目指すことを創設の理念としました。本学もその一翼を担うものとして創立されたわけであります。

新しい大学は、一般教育の理念にたって広く知識を授けて知的能力を高め、深く専門の学芸を教授し応用能力を展開させるとともに、道徳的、人間的にも品位ある人材の育成を目的とするとともに、教育研究の高度化を目指し、地域における学術文化の中心となるべきことを志向してきました。

その後、昭和28年には経済学部、昭和32年には経営短期大学部の創設と順調に発展してまいりましたが、昭和40年代には大学紛争という試練を受け、昭和51年には薬学部が、昭和53年には和漢薬研究所が富山医科薬科大学へ移行するという大きな変遷がありました。

一方、昭和52年には文理学部が人文学部と理学部に独立し、長年の課題であったキャンパスの統合も昭和60年に工学部が高岡市からの移転を終えて完了し、教育研究両面で機能が一段と向上することになりました。現在5学部、4大学院研究科、保健管理センター、水素同位体科学研究センター、地域共同研究センター、総合情報処理センター、生涯学習教育研究センターおよび留学生センター等を擁する総合大学へと発展してきました。

学生数でみると、入学定員では、大学院生を含めて1,700余人、学生総数は7,300余人、そのうち約200人の留学生を数えます。教職員は811名となっております。学生も数では発足当時の約3倍、国際色豊かな学園となりました。また、これまでの50年間に約4万6千余人の卒業生、修了生を社会に送り出し、国内外の様々な分野で活躍をしています。

この間における本学の発展は、ひとえに国、富山県、地域社会をはじめとする各界各位の絶えざるご支援、後援会、同窓会、先輩教職員諸氏のご努力の賜物であり、これらの方々のご尽力に心から敬意を表するとともに感謝を申し上げます。

しかし近年、科学技術の発展や社会経済の国際化が急速に進む一方で地球規模の環境、資源問題や食糧人口問題などが深刻化し、さらに少子高齢化が進むなど社会は急激な変

化を遂げつつあります。こうした変化にともない、大学に対する社会の期待もこれまで以上に高まり、またそれゆえに大学の在り方に対して厳しい批判の目が向けられるようになってきました。

さらに、国立大学にはその設置形態の変更も含めた独立行政法人化が提起され、我が国の高等教育や学術研究は厳しい行財政改革の中で、世界水準の教育研究の推進と創造的な学術研究が期待されるという厳しい課題を迫られております。

こうした批判にこたえて、本学では新しい世紀に向け、国際化社会へのさらなる躍進を促す独創的、先端的な開発能力を有する人材の育成を目指して新たな改革に邁進しているところであります。

50周年を契機に、21世紀に個性輝く大学として発展できるよう、一層の改革に努めるべく教職員一同決意を新たにしているところであります。今後とも、皆様方の温かいご指導、ご鞭撻、ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

また今回の記念事業は、極めて厳しい経済環境にありながら、富山県、県内外の各企業や団体、同窓会、その他多くの方々から賜りました温かいご寄付によりまして実施することが可能になりました。ご厚意に心からお礼を申し上げます。

最後に、この「五十年史」を刊行するにあたり、多大なご尽力をいただいた年史編纂委員はじめ学内外の関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成12年 1月

上 卷 目 次

発刊のあいさつ

富山大学長 時 澤 貢

第 部 総 説 編

第 1 章 富山大学創立の経緯から開学15周年まで	3
第 1 節 開学までの経緯	4
1 学制の改革	4
2 大学の構想	7
3 設置の申請	10
4 開学の準備	14
第 2 節 15年のあゆみ（その 1）	15
1 分教場の統合	16
2 学部の増設	17
3 学科の増設	18
4 専攻科および大学院の設置	19
5 短期大学の設置	19
6 校地および校舎の拡充	20
7 研究施設	22
8 学内諸制度の整備	23
9 大学の財政	24
10 大学後援会	26
第 3 節 15年のあゆみ（その 2）	27
1 一般教育の方法	27
2 学生部および学生相談所	28
3 入学生および卒業生	29
4 学生の補導とその機構	32
5 学生の厚生とその施設	32
6 就職斡旋と学生アルバイト	35
7 学生の健康管理と奨学援護	36
8 学生の課外活動と学生運動	39
9 バッジと学生歌	43
10 科学教育研究室	44
第 4 節 富山大学開学15周年記念式典	45
第 2 章 富山大学の発展 その 1 昭和40年～昭和45年	50
第 1 節 団塊の世代と国公立大学	50
第 2 節 大学紛争	53
1 富山大学紛争の発端 経済学部問題	54
2 紛争収拾への努力	65

第3章 富山大学の試練と模索 昭和45年～昭和54年	84
第1節 大学改革の問題	84
1 紛争解決と大学改革	85
2 『学園ニュース』の中断	88
3 改革の成果	92
第2節 大学紛争の余燼 授業料値上げ反対スト	93
第3節 富山大学の充実、発展への動き	98
1 工学部の統合移転	98
2 富山医科薬科大学の創設	99
3 人文学部および理学部の創設	102
第4章 富山大学の発展 その2 昭和54年～平成11年	103
第1節 学部・学科の充実と大学院の設置と充実	103
1 大学および学部・大学院の拡充整備	103
2 教養部廃止と大学・大学院の整備・拡充	106
第2節 教育改善と大学改革	111
1 前史 改革準備委員会の答申	111
2 その後の教育改革のための模索	112
3 大学設置基準の大綱化と富山大学教育改善検討委員会の設置	112
4 『中間報告』と『富山大学における教育改革について』（答申）	112
5 『答申』以降の進捗 改革のための整備	112
6 教養部の廃止と改組後の各学部	113
7 改革を振り返って	113
第3節 生涯学習について	114
1 国立大学の新たな使命	114
2 地域社会の特徴	114
3 生涯学習教育研究センター	114
4 大学改革と大学教職員の生涯学習	115
第4節 その他の重要施設の設置・充実	115
1 保健管理センター	115
2 水素同位体科学研究センター	116
3 地域共同研究センター	116
4 総合情報処理センター	116
5 生涯学習教育研究センター	117
6 留学生センター	117
第5節 その他の学内共用施設の概略	117
1 事務局庁舎	117
2 大学食堂	117
3 第2大学食堂（工学部福利施設）	118
4 第1体育館	118
5 第2体育館	118
6 第3体育館	118

7	水質保全センター（旧廃液処理施設）	118
8	教職員福利厚生施設	118
9	黒田講堂	118
10	国際交流会館	119
11	富山大学立山施設	119
第6節 紛争後の学生の動向と指導体制		119
1	構内交通対策の実施と学生集団の動向および富山大学の学生指導体制	119
2	会計検査院の通達による学寮紛争	121
3	事務局庁舎3階学長室前の廊下座り込み	121
4	皇太子来富反対看板撤去問題	122
5	柳田友道学長への不当行為	122
6	大学祭	123
7	富山県警機動隊に守られての警察の学内施設捜査と学生逮捕	124
8	黒田講堂改築に伴う紛争	125
9	課外活動施設の問題	126
10	学生自治会	126
11	北陸地区国立大学体育大会	127
12	北陸3県大学学生交歓芸術祭	128
13	残された問題	128
第7節 国際交流について		130
1	学術交流協定 その1（遼寧大学）	130
2	国際交流基金の設置	131
3	教職員福利厚生施設の留学生宿舍への転用	132
4	「富山県留学生等交流推進会議」の設置	132
5	留学生増の実体と対応	133
6	留学生指導相談室の設置	134
7	留学生センター、国際交流会館の設置	135
8	学術交流協定 その2（マレーシア工科大学）	136
9	国際交流の推進	136
第8節 管理運営		137
1	評議会	137
2	教養教育委員会	138
3	自己点検評価委員会	138
4	将来計画委員会	138
5	国際交流委員会	138
第9節 事務局・学生部等事務組織の変遷		139
1	富山大学の設置と本部（事務局・学生部）の発足	139
2	事務局の移転	139
3	事務組織の改編	139
第5章 入試制度の変遷		142
第1節 創立当時の制度の変遷と問題点について		142

1	第1回富山大学入学者選抜試験	142
2	白線浪人	142
3	進学適性検査	142
4	入学試験期1期と2期との区別	143
5	共通第1次入学試験制度導入の背景	143
6	入学定員について	144
7	1期2期制の廃止と共通1次試験	145
8	受験機会の複数化	147
9	分離分割方式と連続方式	149
10	分離分割方式	150
11	入試方法の多様化	151
12	残された問題	152
第6章 富山大学の現状と将来		156
第1節 自己点検評価の経緯		156
第2節 開学50周年記念事業		163
1	記念式典・祝賀会の挙行	163
2	記念学術講演会等	169
3	記念植樹および鋤入式を実施	169
4	大学開放	170
5	国際交流活性化推進事業	170
6	富山大学50年史等の刊行	170
7	図書の充実	171
8	事業の経過と事業委員会名簿	171

第 部 部 局 編

人文学部

第1章	富山高等学校	179
第1節 富山高等学校の創設		179
1	馬場家の篤志	179
2	開校	179
3	馬場家のこと	180
4	開校式のころ	180
第2節 教育と学生生活		181
1	教育方針	181
2	校友会の活動と寮の生活	181
3	思想問題など	181
第3節 戦時下の富山高等学校		182
1	集団勤労作業	182
2	教授要綱の改訂	182

3	修業年限の短縮	182
4	学徒出陣	182
5	官立(国立)移管	183
第4節	敗戦後の富山高等学校	183
1	勤労働員引揚式	183
2	復員学生	183
3	白線浪人	184
4	理乙コース	184
5	富山高等学校の廃止	184
第2章	文理学部時代	185
第1節	文理学部の発足	185
第2節	学科、学科目・講座、専攻の編成	185
第3節	教授会運営	189
第4節	一般教育担当学部として	191
1	教育の理念と実施体制	191
2	カリキュラムの編成	192
3	学生の指導	194
4	不正受験(カンニング)問題	195
第5節	蓮町からの移転問題、五福集中計画	196
1	発足期 西部高校への移転問題	196
2	五福集中計画	197
第6節	将来構想と教養部設置	199
1	教育学部との「統合」	199
2	1950年代後半の文学部、理学部分離独立構想	201
3	3学部(教養部、人文学部、理学部)構想、一般教育審議会、教養部設置へ	202
第3章	文理学部改組から人文学部設置へ	212
第1節	文理学部の改組問題 人文学部の設置	212
第2節	大学紛争と文理学部	219
1	昭和44(1969)年2月からの文理学部文学部の無期限ストライキ	219
2	70年安保、紛争から改革へ	224
3	昭和46年度以降、自然収束へ	225
第3節	人文学部の基盤整備、充実	227
1	人文学部の研究教育体制	227
2	人文学部長期計画	232
第4章	人文学部の発展期	237
第1節	遼寧大学との交流協定	238
第2節	大学院人文科学研究科の設置	239
1	昭和60年度の概算要求	240
2	昭和61年度の概算要求	240

3	大学院受験の状況、出身大学	241
4	大学院修了者の就職	242
第3節	18歳人口の急増急減に対応する臨時増募	242
第4節	学生の政治運動 昭和62年9月9日事件	243
第5節	人文学部校舎の新築	244
1	第一期工事	244
2	幻の第二期工事から新校舎	246
第6節	教養部廃止と人文学部の組織改編	247
第7節	人文学部の組織改編から現在	250
1	平成5(1993)年から現在	250
2	就職およびその指導体制について	251
3	広報活動について	253
4	人文学部における国際交流について	254
5	人文科学研究科	257
第5章	各コースの沿革と現在	259
第1節	人文学科	259
1	哲学コース・人間学コース	259
2	日本史コース	267
3	東洋史コース	276
4	西洋史コース	281
5	文化構造論コース	284
6	言語学コース	288
7	心理学コース	291
8	社会学コース	292
第2節	国際文化学科	294
1	国際文化論コース	294
2	考古学コース	299
3	人文地理学コース	306
4	文化人類学コース	309
5	比較社会論コース	317
6	比較文学コース	321
第3節	言語文化学科	325
1	日本言語文化コース	325
2	朝鮮語・朝鮮文学コース	329
3	中国言語文化コース	336
4	英米言語文化コース	339
5	ドイツ言語文化コース	343
6	フランス言語文化コース	350
7	ロシア言語文化コース	352

教育学部

第1章 教育学部の発足	361
第1節 前史 師範学校等の沿革	361
1 富山師範学校の生い立ち	361
2 教育令・改正教育令のころ	362
3 明治前期の教員養成	363
4 明治後期の教員養成	363
5 大正期の師範教育	365
6 戦時体制下の師範学校教育	366
7 戦後の師範学校の教育	367
第2節 教育学部の設置申請	368
1 新制富山大学の設置	368
2 教育学部の設置申請	368
3 進学適正検査	370
4 入学試験	370
5 開校記念日	370
第3節 発足時の組織・形態	370
1 教育学部の発足	370
2 教官陣容と講座組織	373
3 「富山大学教育学部規程」の制定	378
4 最低履修単位数の変遷	381
5 教員需要と2年制課程	381
6 編入学制度	382
7 現職教育・臨時教員養成所の開設	382
8 教育学部紀要の創刊	382
第2章 学部組織の整備（昭和30年代）	384
第1節 教育体制の展開	384
1 義務教育教員の計画養成学部としての展開	384
2 講座制から学科目制へ	385
3 学生の指導体制	385
4 学生の出身地の傾向と学生寮	387
第2節 研究体制	389
第3節 施設設備の整備	389
第4節 学生生活の実態	392
1 学業生活	392
2 学業外の生活	393
第3章 学部の模索と充実（昭和40年代）	401
第1節 教育専攻科の設置	401
1 設立の経緯	401
2 教育課程	402

3	修了者の進路	403
第2節	教育体制の拡充と整備	403
1	養護学校教員養成課程の設置	403
2	幼稚園教員養成課程の設置	405
3	新校舎の竣工	407
4	学科目・課程制の実施	408
第3節	教員志望者就職難の萌芽	408
第4節	大学紛争と教育学部の対応	411
1	教育系学生ゼミナールと教育学部自治会	411
2	富大紛争初期の教育学部	412
3	教育学部の封鎖	412
4	新たな展開	413
5	終息へ	416
第4章	学部の発展（昭和50年代）	419
第1節	施設・設備の拡充	419
1	旧「保健体育教棟」の竣工	419
2	「附属養護学校」の独立（昭和51年4月）	419
3	「弓道場」の竣工	419
4	「第2体育館」の建設	419
5	「自転車置場」の設置（昭和53年6月）	420
6	「第3教棟」の増築	420
7	「附属教育実践研究指導センター」の竣工	421
8	「第3体育館」の着工	421
第2節	入試制度の変革と学生像の推移	422
第3節	教育・研究体制の整備	422
1	カリキュラムの整備	422
2	「実地指導講師」制度の導入	424
3	「宿泊研修」の展開	425
4	教員就職の状況と対策	426
5	公開講座「健康スポーツ」	427
6	『学部紀要』のA・B二部立ての採用	428
7	「科学研究費補助金」の取得者の増加	428
8	「在外研究（長期・短期）」	430
9	「文部省内地研究員」	430
10	「国際交流」について	430
第5章	学部の発展（昭和60年代～）	433
第1節	情報教育課程の設置	433
1	情報教育課程設置の趣旨	433
2	同課程の特色	433
3	教育情報コース	433

4	環境情報コース	435
5	指導体制とカリキュラム	435
6	教育実践研究指導センターとの連携	436
7	1回生の卒業	436
8	新たな展開	437
第2節	入試制度の変更	437
1	A・B日程と複数受験制度	437
2	分離・分割方式	438
3	推薦入学制度の導入	440
4	学部案内の作成	440
第3節	就職指導と進学	441
1	教員就職の状況と学部職業補導委員会 (平成6年度より「就職指導委員会」と改称)	441
2	専攻科と大学院進学	444
第6章	学部の改組と展望	446
第1節	大学教育改革と教育学部の対応	446
1	「4年一貫教育」体制の発足	446
2	旧課程生に対する移行措置	446
3	新・教育課程の内容と特色	448
4	教養部教官の所属替え	448
5	新制度生の「特別研究」不許可数	448
第2節	入試制度の変更	449
1	国立大学の入学者選抜方法	449
2	「分離・分割」制度とその困難さ	449
3	教育学部における「推薦入試」枠の拡大	449
4	学部改組に伴う入試の改革	450
第3節	「自己点検評価」の実施	451
1	「自己点検評価委員会」の設置	451
2	『富山大学教育学部の教育と研究』の編集	451
3	今後の問題点	453
第4節	教育学部改革と今後の展望	453
1	学部改組の経緯	453
2	改組の内容	454
3	「新・カリキュラム」の制定	459
4	「教育実習」の改革	459
5	教員採用数の推移	461
6	教員採用試験への対応	462
第7章	附属教育実践研究指導センター	464
第1節	センターの発足	464
第2節	施設・設備	464

第3節	新設まもないセンターへの期待	465
第4節	センターの発展期から充実期へ	465
第5節	センターの新しい時代	466
第6節	センターの新たな発展	467
第7節	センターの新たな方向	468
第8章	附属学校園	470
第1節	附属小学校	470
1	略史	470
2	教育研究活動の展開	472
3	現状と展望	475
第2節	附属幼稚園	475
1	略史	475
2	教育研究活動	478
3	現状と展望	481
第3節	附属中学校	481
1	略史	481
2	教育研究活動の展開	484
3	現状と展望	487
第4節	附属養護学校	488
1	略史	488
2	研究教育活動の展開	491
3	現状と課題	493
第9章	大学院教育学研究科修士課程	496
第1節	設置の経緯	496
第2節	設置目的と背景	499
第3節	教育・研究体制と現状	500
第4節	施設・設備	503
第5節	課題と展望	504
経済学部		
第1章	官立高岡高商の設立から転換まで	509
第1節	高岡高等商業学校創設の背景	509
第2節	創設費用の地元負担と校舎建設・校則整備	510
第3節	教官陣容の整備と校風の確立	514
第4節	開校10周年記念事業	521
第5節	戦時下の学園と東亜科の設置	525
第6節	高岡経済専門学校から工専への転換	529
第2章	経済学科としての復活と経済学部への昇格	535
第1節	富山大学文理学部経済学科の設置経緯	535

第2節	経済学科の特質	538
第3節	学部昇格運動の展開と学生による祝賀祭	539
第4節	五福新校舎への移転	541
第3章	経済学部の充実（第1発展期）	543
第1節	学部昇格前後の学科目と教官陣	543
第2節	学生と教官の定員増	545
第3節	北陸経済研究所の開設と事業	545
第4節	専攻科の設置	548
第5節	経営短期大学部の併設	548
第6節	創立35周年事業と40周年事業	551
第4章	学部紛争と単位訴訟	555
第1節	教官人事改善の要望	555
第2節	経済学部教官選考内規の制定	556
第3節	単位認定・修了認定訴訟の提起	558
1	単位訴訟の背景事実	558
2	訴訟の内容と進行	558
3	第1審における原告らの請求内容	558
4	第1審判決　　大学の単位認定と司法審査	559
5	第2審判決　　専攻科修了認定と司法審査	560
第4節	学生の参加要求と全国的大学紛争	562
1	学生の参加要求	562
2	自治と学生運動	563
3	学生会館の問題	564
4	統合寮の運営	564
5	経済学部へのうねり	564
第5節	紛争下の授業と入試	567
1	全学ストライキと学外入試	567
2	機動隊導入とその波紋	567
3	長引く紛争と正常化への努力	568
4	学生運動の変容	569
第5章	経済学部の再建と発展（第2発展期）	574
第1節	学部教育の正常化と経営学科の増設	574
1	学部教育の正常化と経営学科設置への軌跡	574
2	経営学科の設置	575
第2節	最高裁判所判決と訴訟問題の解決	582
1	双方の上告に基づく2判決	582
2	単位認定に関する最高裁判所判決	582
3	専攻科修了認定に関する最高裁判所判決	583
4	富山地裁の和解勧告に基づく解決	585

第3節	日本海経済研究所の活動	586
第4節	創立50周年記念事業	588
第5節	経済学部校舎の増築	602
第6節	経営法学科の増設	602
1	法学系講座(学科目)の経緯	602
2	国立大学唯一の経営法学科	603
第7節	創立60周年記念事業	604
第6章	経済学部興隆の新展開(第3発展期)	611
第1節	経営短大の合併による昼夜開講制と大学科目制の導入・教員組織の充実	611
1	工学部移転にからむ経営短大改組問題の台頭	611
2	高岡短大創設と経営短大改組の動き	611
3	経営短大の実情と母体学部改組への布石	611
4	経済学部での問題点	613
5	昼夜開講制についての「中間報告」	614
6	概算要求	615
7	改組の実体	615
第2節	大学院経済学研究科修士課程の設置	617
1	設置のための準備経緯	617
2	研究科の設置目的と特色	618
3	研究科の概要	618
4	その他	620
第3節	日本海経済研究所の環日本海経済研究	620
第4節	教育改革による新カリキュラム	623
1	教育理念	623
2	教育課程の内容と特色	623
第5節	経済学部校舎の改築	625
1	建物の不足	625
2	管理研究棟の老朽化	626
3	管理研究棟の増改築	626
4	新しい管理研究棟	627
第6節	創立70周年記念事業	628
第7節	外国人留学生・研究者の受け入れと学術交流協定締結	633
1	外国人留学生の受け入れ状況	633
2	受け入れの基本方針と課題	635
3	留学生の指導体制と支援体制	635
4	国際交流	636
5	学生の海外留学・研修	637
第8節	卒業生の進路	637

下巻内容項目

第 部 部局編

理学部

- 第 1 章 理学部の歴史的背景
- 第 2 章 文理学部の整備（昭和28～41年）
- 第 3 章 理学部（理学科）の発展 その 1
(昭和42～51年)
- 第 4 章 理学部の発展 その 2（昭和52～平成4年）
- 第 5 章 理学部の発展 その 3（平成5年以降）

工学部

- 第 1 章 工学部創設への序章
- 第 2 章 工学部の整備と拡充
- 第 3 章 工学部発展への胎動と苦悩
- 第 4 章 工学部五福移転の達成と
高次工学教育研究機関への展開
- 第 5 章 研究・教育活動と学生・院生の動向
- 第 6 章 工学部の運営組織と諸施設の充実
- 第 7 章 仰岳会のあゆみ

廃止された部局

1 薬学部

- 第 1 章 前 史
- 第 2 章 黎明期
- 第 3 章 薬学部の整備・充実（奥田キャンパス時代）
- 第 4 章 薬学部の拡充・発展
(昭和38年から富山医薬大への移行まで)
- 第 5 章 医科薬科大学の創設

2 和漢薬研究所

3 教養部

- 第 1 章 教養部の設置
- 第 2 章 教育体制の推移
- 第 3 章 学生問題への対応
- 第 4 章 教養部将来計画とその終焉

4 経営短期大学部

- 第 1 章 総 論
- 第 2 章 勤労学生
- 第 3 章 支持団体
- 第 4 章 改 組

附属図書館

- 第 1 章 附属図書館の沿革
- 第 2 章 施設・設備
- 第 3 章 管理運営
- 第 4 章 図書館業務
- 第 5 章 図書館資料

保健管理センター

- 第 1 章 沿 革
- 第 2 章 組織と運営
- 第 3 章 施設と運営
- 第 4 章 事 業
- 第 5 章 将来展望

水素同位体機能研究センター

- 第 1 章 沿 革
- 第 2 章 運営機構および研究組織
- 第 3 章 施設および設備
- 第 4 章 教育および研究活動
- 第 5 章 将来展望

地域共同研究センター

- 第 1 章 設置の経緯
- 第 2 章 地域社会への窓としての活動
- 第 3 章 設備の充実と建物の増築

総合情報処理センター

- 第 1 章 沿 革
- 第 2 章 運営組織とスタッフ
- 第 3 章 施設および計算機システムの変遷
- 第 4 章 業務サービスおよびその他の活動
- 第 5 章 研究・教育・業務支援活動

生涯学習教育研究センター

- 第1章 沿革
- 第2章 組織・運営
- 第3章 センター事業
- 第4章 センターの研究活動
- 第5章 今後の展望

留学生センター

- 第1章 留学生センターの設置
- 第2章 留学生センターの組織と運営
- 第3章 留学生センターの施設と設備
- 第4章 留学生センターの業務

事務局・学生部

- 第1章 事務局
- 第2章 学生部

第 部 資料編

- 1 沿革図
- 2 沿革
- 3 歴代主要役員
 - (1) 歴代学長一覧
 - (2) 歴代部局長等一覧
 - (3) 歴代共同利用施設等の長一覧
 - (4) 歴代評議員一覧
(各学部および教養部の選出評議員)
 - (5) 歴代事務局長一覧
 - (6) 歴代部・課長等一覧
 - (7) 歴代事務長一覧
- 4 名誉教授一覧
- 5 組織図
- 6 教職員定員の推移
- 7 歳入歳出変遷表
 - (1) 歳入決算額の推移
 - (2) 歳出決算額の推移

8 土地および建物面積

- (1) 昭和24年5月31日当時の土地および建物面積と所在地
- (2) 土地および建物面積
- (3) 富山大学口座の敷地取得経緯
- (4) 富山大学課外活動施設地口座の敷地取得経緯
- (5) 富山大学教育学部附属学校口座の敷地取得経緯
- (6) 富山大学教育学部農場実習地口座の敷地取得経緯
- (7) 富山大学学生寄宿舎口座の敷地取得経緯
- (8) 富山大学自然観察実習センター口座の敷地取得経緯
- (9) 富山大学奥田宿舎口座の敷地取得経緯
- (10) 富山大学五艘宿舎口座の敷地取得経緯
- (11) 主な建物の整備経緯

- 9 学部別入学定員の推移一覧
- 10 外国人留学生受け入れ状況
- 11 年度別卒業生数および修了者数
- 12 学部別卒業生および研究科別修了者の進路状況
- 13 科学研究費補助金採択状況
- 14 外部資金の受け入れ状況の推移
- 15 在外研究員・内地研究員派遣人数調
- 16 民間等との共同研究実施件数一覧
- 17 富山大学附属図書館蔵書の推移

執筆者一覧

編集後記